

平成 27 年 6 月 4 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520367

研究課題名(和文) 亡命ロシア文化におけるテキストと視覚芸術に関する研究

研究課題名(英文) Literary Text and Visual Arts in the Russian Emigre Culture

研究代表者

小椋 彩 (Ogura, Hikaru)

東京大学・人文社会系研究科・研究員

研究者番号：10438997

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：3年間にわたる研究期間を通じて、アレクセイ・レーミゾフとパリの亡命ロシア文化に関して様々な視点から検討を深められた。レーミゾフが、自らが掲載されているとして1924年の自著で言及した「日本の雑誌」の詳細について解明し、レーミゾフおよびロシア・モダニズムの日本における受容とあわせて論文として発表すると同時に、レーミゾフの視覚芸術(ポートレート、カリカチュア)観を明らかにした。さらに、これまでに未解明であった戦間期の亡命ロシアと亡命ポーランドのコミュニティ間の交流について、亡命ポーランド作家・画家ユゼフ・チャプスキに着目し調査を開始、調査の経過を2013年日本ロシア文学会で発表した。

研究成果の概要(英文)：For the past three years I have examined the interaction between the literary texts and the visual arts of Aleksej Remizov in the context of Russian Emigre Culture. I closely examined (1) the acceptance of Russian Modernism in Japan, (2) Caricature of/about Remizov, (3) interaction between Remizov and a Polish Emigre artist J. Czapski. The research achievements were published in academic journals in Japanese, English and Russian.

研究分野：ロシア文学、ポーランド文学

キーワード：ロシア文学 亡命文化 視覚芸術 アレクセイ・レーミゾフ

1. 研究開始当初の背景

(1) アレクセイ・レーミゾフは、亡命先のパリで文学作品出版の機会を完全に奪われた際、画業によって糊口をしのいだ。「書く」と「描く」とは、行為として切り離せないゆえに、作家が画家である例は多い。この「書く」と「描く」という両行為を、カリグラフィーとドローイングによって「絵入りアルバム」というジャンルに統合し、独自の美的様式に発展させたのがレーミゾフであるが、近年、文学と視覚芸術の両面から研究される必要が高まっている。レーミゾフに特化した国内の先行研究は唯一、淵上克司『剪り取られた眼で』(国書刊行会、1992)があるが、ソ連時代に黙殺されていた亡命作家について、日本国内で入手可能な資料のみを参照した一面的研究であった。アーカイブ調査を行った美術研究者ジュリア・フリードマンが初めて作家の画業を中心に扱ったモノグラフを出版したが(2011年)、これは美学に特化したもので、文学への目配りがなく、テキスト中の絵の機能や関係にも言及していない点で包括性に欠けるという問題点があった。

(2) ベレストロイカ後に始まった亡命文化の再評価に伴い、レーミゾフの文学研究の成果が増える一方、画業研究には検討すべき課題が山積している。レーミゾフの視覚芸術はその文学とともに、19世紀末ロシアや20世紀初頭ヨーロッパの芸術潮流、戦間期の社会的状況、亡命者を取り巻く文化的環境等と密接に結びながら発展してきた。従って、レーミゾフの視覚芸術を同時代的文脈で捉えることは研究上必須であるが、今のところこうした研究は皆無に等しい。これは先述したように資料入手の困難に起因するが、その他にも、一般に文学研究と視覚芸術研究は個別に行われていること、文学研究者が個別の国の事情に専心する傾向があり、レーミゾフ研究においてもその事情が顕著であることによる。

2. 研究の目的

レーミゾフと親交のあった亡命ロシア人、及び非ロシア人をキーパーソンとして取りあげ、作品・書簡・日記・回想等を検討し、(1)同時代の芸術潮流におけるレーミゾフの位置づけを明らかにすること、(2)亡命ロシア文化におけるテキストと視覚芸術の関係について独自の視点を提供することを目的とするが、このうち、亡命ポーランド人画家ユゼフ・チャプスキとの交流はレーミゾフ研究では未着手のテーマであり、レーミゾフ研究ばかりか、亡命ロシア文化研究にとっても独

創的視点を提示できると確信する。

3. 研究の方法

レーミゾフの言語芸術研究と視覚芸術研究は、とくに後者が新しいテーマであることもあり、これまで個別に行われてきた。しかし、本研究は両者の境界的ジャンルを扱うことから、これらを同時並行的に検討する。

(1) レーミゾフ研究：レーミゾフの亡命後のテキスト分析を継続する。および、レーミゾフの視覚芸術の技法の変遷、及びテキストと絵の機能を明らかにするため、これまでのアーカイブ調査のまとめ、および、未見のアーカイブ調査を行い、成果を順次まとめる。

(2) 亡命ロシア文化研究：1920年代以降のパリの亡命ロシアにおける視覚芸術を検討、レーミゾフを同時代の文化的文脈に位置付ける。また、同時代パリの亡命ポーランドのコミュニティについても調査、影響関係を調べる。

4. 研究成果

3年間にわたる研究期間を通じて、アレクセイ・レーミゾフとパリの亡命ロシア文化に関して様々な視点から検討を深められた。

(1) レーミゾフが、自らが掲載されているとして1924年の自著で言及した「日本の雑誌」について、長らくその存在すら疑問視されてきたが、この雑誌の詳細について解明し、論文として発表した。論文発表に先立ち、ロシア文学研究所(ロシア、サンクト・ペテルブルグ)所属のエレーナ・オバトニナ氏に分析結果を連絡しており、氏の監修によるレーミゾフ著書の注釈に注として引用されている(2012年、ロシア語)。調査はその後継続し、さらに詳細を付加してセルビアのスラヴ学研究所雑誌に投稿、査読を経て掲載が決定している(2015年)。また、この調査の過程で、レーミゾフおよびロシア・モダニズムの日本における受容に関して、ロシア人日本学者のセルゲイ・エリセエフの果たした役割について新事実を発掘した。この事実も含めて、レーミゾフの視覚芸術(ポートレート、カリカチュア)観を明らかにする論文として発表した。

(2) これまでに未解明であった戦間期の亡命ロシアと亡命ポーランドのコミュニティ間の交流について、レーミゾフと亡命ポーランド作家・画家ユゼフ・チャプスキに着目し調査を開始した。両者の関係に関する調査の経過を2013年日本ロシア文学会全国大会(於・東京大学)で発表した。コロンビア大

学でのアーカイブ調査によってさらに両者の新資料を入手し、現在、分析を進めるとともに、結果の刊行準備中である。筆者は亡命ロシア文化研究を継続するが、今後、同スラヴ語圏のポーランド文化との関連づけをテーマに加えて研究を進めていく予定である。亡命ロシア文化研究が世界的に盛り上がりを見せる中、これを亡命ポーランド文化研究との関連付けることは、国内外のロシアおよびポーランド研究に対しきわめてインパクトのある学際的な研究結果を期待できる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

Hikaru Ogura, Acceptance of Russian Modernism in Japan: A. M. Remizov and S. G. Eliseev, Russian Emigration at the crossroads of the XX-XXI Centuries.

Proceedings of the International Conference dedicated to the 70th Anniversary of the New Review / Novyi Zhurnal. 査読無、vol. 1, 2012, 14-19.

小椋 彩, 『シベリアのレッスン』: ドキュメンタリーフィルムとポーランドの「小さな祖国」、映像の中の冷戦後世界 ロシア・ドイツ・東欧研究とフィルムアーカイブ、査読無、1巻、2013、97-109

小椋 彩, 作家の戯画 — 『クークハ』と日本におけるレーミゾフ受容、SLAVISTIKA、査読有、第28号、2013、45-63

Hikaru Ogura, «Японский журнал» и карикатуры на Алексея Ремизова. Сборник Матице српске за slavistiku, 査読有、vol. 87, 2015, not yet.

[学会発表](計7件)

Hikaru Ogura, Acceptance of Russian Modernism in Japan: A. M. Remizov and S. G. Eliseev". International Conference: "Russian Emigration at the Crossroads of the XX-XXI Centuries" dedicated to the 70th anniversary of The New Review / Noviy Zhurnal. 2012.04.27, Columbia University (NY, USA).

Hikaru Ogura, Writing and Handwriting of A.M. Remizov. The British Association for Slavonic and East European Studies Annual Conference 2013, 2013.04.05, University of Cambridge, Fitzwilliam College (Cambridge, England).

小椋 彩, 故郷を遠く離れて: 「移動」とポーランドのドキュメンタリーフィルム、2013年秋科研費補助金合同研究会「ロシア・東欧における移動・運動・行動」、2013年9月13日、立教大学(東京都豊島区)

小椋 彩, (招待講演) 冷戦終了後の世界と「小さな物語」—ポーランド・ドキュメンタリー映画、山形国際ドキュメンタリー映画祭、2013年10月12日、山形学び館(山形県山形市)

小椋 彩, レーミゾフとチャプスキ: 亡命芸術家の交流、平成25年度日本ロシア文学会研究発表会、2013年11月02日、東京大学(東京都文京区)

小椋 彩, 雑誌「Chisla」とその周辺、単独発表、科研基盤B「20世紀前半の在外ロシア文化研究」2014年度秋季研究会、2014年9月13日、北海道大学(北海道札幌市)

Hikaru Ogura, Migration in the Polish Documentary Film, International Symposium: Images of East European Literature: Their Variable and Invariable in the Past and Present. 2012.09.28, Rikkyo University (Tokyo, Toshimaku).

[図書](計1件)

オルガ・トカルチュク著、小椋彩訳、逃亡、2014、全413頁

[産業財産権]

出願状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:

出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小椋 彩 (OGURA, Hikaru)

東京大学・人文社会系研究科・研究員

研究者番号： 102438997